古今和歌集

春立ちける日詠める

袖ひちてむすびし水の凍れるを春立つ今日の風やとくらむ

紀　貫之

（巻一・春上）

桜の花の散るを詠める

ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

紀　友則

（巻二・春下）

題知らず

五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

よみ人知らず

（巻三・夏）

秋立つ日、詠める

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

藤原敏行

（巻四・秋上）

ちはやぶる神代も聞かず竜田川から紅に水くくるとは

在原業平

（巻五・秋下）

冬の歌とて詠める

山里は冬ぞ寂しさまさりける人目も草もかれぬと思へば

源　宗于

（巻六・冬）

題知らず

思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを

小野小町

（巻十二・恋二）

五節の舞姫を見て詠める

天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ乙女の姿しばしとどめむ

良岑宗貞

（巻十七・雑上）